

小春日和

お茶の水女子大学附属中学校 2年 梨原 希珠

「人から好かれる才能だけはあるのよね」

学校の先生にも友達にも最悪され、人に囲まれて生きてきた私に、母はときどきそう言う。その通りだと思う。小学校で過ごした六年間、私が見てきたのはいつも同じような光景ばかりだった。女の子たちは私の一番の親友の座を奪い合い、名前すらあやふやな男の子が告白してくるといふこともしょっちゅうあった。私は他人に好かれるのが上手い。でも、それだけだ。それ以外は何の取り柄もない。頭は悪いし運動もできないし、可愛くもないし性格も悪い。それなのに、ただなんとなく生まれ持った才能に頼って愛されてきた。私は気づいたときにはそんな自分やそれをもてはやす周りのことが嫌になつていた。

私のそういう人たらしなところは、私が生まれる前に母と離婚した父からの遺伝であるようだ。父には圧倒的なカリスマ性があり、女遊びが激しい彼と長くは続かないと分かっていても母はやはり結婚を選んでしまったらしい。母と結婚する前に既にバツイチだった彼は、今も三人目か四人目の奥さんと暮らしているに違いないとも言っていた。中学校の入学式の後、教室でこの先についての軽い説明があり、その後のトイレ休憩の時間に早速コミュニケーションの形成が始まる。私も腐った未来への一歩を踏み出した。顔に笑みを張り付け、後ろの席を振り返る。目の前の内気そうな女の子に自分が何を言うべきか、私にはすぐにわかる。

「可愛い名前だね」

私の言葉に、膨大な量の教科書に記名していた園原冬音は「えっ、私？」と顔をあげた。

「うん。それに私は春香だから、おそろいみたいじゃない？」

私のお世辞に、一気に表情をほころばせた彼女。私とはまるで違う、素直で良い子だと思った。私は結局小学校の頃とほとんど同じような生活をしていただけ、少しだけ変化があった。冬音ちゃんと仲良くなったのだ。私たちはあつという間に打ち解けて、春ちゃん、冬ちゃんと呼び合うようになった。人間関係は基本広く浅くだった私が特定の子とここまで仲良くなったことは今までになかった。相変わらず周りに媚びてばかりいた私を、冬ちゃんは「春ちゃんは言っただけでほしいときに言っただけを言っただけで素敵な女の子だよ」とほめてくれた。初めて友達ができたような、そんな気がした。

そしてその年、私は初恋を迎えた。きっかけは、同じクラスの男の子たちの噂話をたまたま聞いてしまったこと。ひとりは私のくだらない才能にほだされ、私を好いてしまっているようだった。

「マジ、鈴木春香と付き合いたいわあ。高島は狙ってないよな？」

「あんま話したことないけど、あの人なんか作ってる感じするっていうか。俺はちょっとタイプじゃないかな」

作ってる。私のことをそんなふうに評したのは彼が初めてだった。ほとんど話したこともない彼が、そんなにも私のことを理解している。タイプじゃないと言われたばかりなのに、気づけば私は高島くんのことばかり考えるようになっていた。でも、目で追っていればすぐに気が付く。高島くんが冬ちゃんのことを気にし始めていることに。

彼には人の本質を見抜く力があるのだから、真に優しい冬ちゃんみたいな子を選ぶのは当然だ。それを理解していたからこそ、私は冬ちゃんに嫉妬した。どうしようもなく優しく、私みたいなのうわべだけの人間では手の届かない彼女に。

「ほんとごめん、他に好きな人いるんだ」

諦め半分の告白をそう断られた日、私は冬ちゃんの家でわんわん泣いた。

「春ちゃんの良さがわからないんだよ、高島くん馬鹿なんだよ」

私と一緒に泣き出してしまった冬ちゃんに、まさか言えるはずがない……高島くんのお好きな人って冬ちゃんなんだよ、なんて。

☆

ごめんね、春ちゃん。私、春ちゃんが本当は汚いこと、知ってる。高島くんが私のことを好きなのも。私たちの名前がおそろいみたいなのはなんでだと思う？ 姉妹なんだよ、私たち。お母さんがこっそり教えてくれた。春ちゃんのお父さんは、私のお父さんでもあるの。だから私は春ちゃんのことなんとなくわかるし、他人に媚びてるだけで本当は誰にも心を許さない春ちゃんの中にも入っていった。みんなの心の中に甘ったるいピンク色の領域を作っちゃう春ちゃんの技に抗えるのは、私や高島くんだけ。

ねえ、春ちゃん。高島くんの名前を知らないわけじゃないでしょ？ ……「夏樹」っ。お父さんの才に抗えるのは、お父さんの血筋くらいのものみたいだね。それでもやっぱり恋はしちゃうっていうのが厄介だけどね……。

血のつながり以前に、私は友達として春ちゃんのことを大切だった。だから、二人をつき合わせるわけにはいかなかった。高島くんが私のことを好きなのは偶然なんかじゃなくて、私の努力の成果だよ。私だってお父さんの娘だからさ、そういうこともできちゃうんだ。戦い方が違うだけで、私や高島くんもきつと、春ちゃんと同じものを持って。本当に、こうするしかなかったんだよ。

ごめんね、春ちゃん。